

---

# ネギと手品と四暗刻

ザムディン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギと手品と四暗刻

### 【著者名】

ザムティン

### 【ISBN】

25836

### 【あらすじ】

教習所での普通免許合宿20日間。  
出会い、別れ、ネギ、手品、四暗刻…

## 1 旅立ち

2010年3月17日、水曜日。

わたしはどでかいスポーツケースを引きずつて歩いていた。

始まりは、一年前。

就職先に面接に行つた際、「免許は取るんだよね?」と当たり前のように聞かれたが、わたしは内心「は?」と思つた。資格については高校時代、それこそ洗脳に近い教育の末散々取らされた訳だが、まさかプログラマーで面接を受けに来て自動車免許について聞かれるとは思つていなかつたのだ。

わたしにとつて移動手段とは「=自転車」なわけで、何が悲しくてわざわざガソリンまで吸わせて死にに行かなきやならないのか、どう結局、喧嘩を売る訳にも行かず、その場凌ぎで適当に言つた「はい。卒業直後に取得したいと思つています。」の一言が波乱への扉だつた。

現実逃避しているうちに気がついたら卒業間近の2月になつていた。もちろん、その間段取りなど一切取つていない。

正直どこの教習所でも良かつたので、手続きは母に一任していた。今更、釜茹でだらうと針山だらうと地獄に行くのは代わりはしない。しかし、任せたはずの母から「あんたはどこの合宿所がいいの?」と返事が返つってきた。

どこのいいから任せたのに、どこのいいの、とはこれいかに。

とりあえず「料金格安」をテーマに検索した結果（そもそも通いよりも合宿の方が安上がりなので、最初から合宿前提だった。その後今更、どこがいいの？とは納得いかない。）「那須合宿センター」に決定した。

日程は3月15日から30日。入社式は4月1日なので、31日に免許センターに行って、という綱渡りスケジュールだ。もちろん、教習が伸びたりとか、免許試験に落ちたら、ということは考慮していない。考えたくも無かつた。

しかし、インターネットでは（空きあり）になっていたにもかかわらず、電話してみると15日は無理で、17日入学になってしまふ、という。もちろん卒業も繰り下がり、31日になる。

なぜ入学が2日遅れるのに卒業は1日しか遅れないのかと疑問だつたがそれはおいといて、別に入社に間に合わずともしつたこっちゃなかつた。釜茹でから針山に行くのが一日ずれるだけの話だ。

会社に電話し、1日だけ入社が遅れる旨を伝え、17日の入学が決定した。地獄行きの日程が決まったわたしは、再び現実逃避の日常に戻つた。

自由登校を経て、卒業。また遊び狂い、目が覚めたらその日の朝になつていた。

早朝、スーツケースと旅行バッグを持ち、母と家を出た。

バスで宇都宮駅へ、そこから新幹線一駅で那須着というあつけない旅だが、文字通りお荷物のお陰で一気に苦行と化した。

ひいひい言いながら売店でおにぎりを買ってからやつとホームにたどり着くと、母は「どうせ10分であつちに着くからドアの前で待つてな。」と言つ。[冗談じやない。]

新幹線が到着し、乗り込む。乗つて、車両に入つてドアに一番近い席に座ると、母がこつちを見ながら窓を叩いてくる。

別に座つたつていいじゃねえかよ、と思つてゐつちにて発車。

（ああ、やつと座つて落ち着ける…）

深いため息を吐くと、母からメールが届く。

「やつは指定席だよー。」（本文一行目）

那須に着くまでの10分間、わたしは通路に陣取り、トイレに入る人を眺める便所妖怪と化していた。

## 2 入学

那須駅に着くと、集合場所となつてている西口階段下には、同年代のスーツケースを持つた好青年達がちらほらと集まつていた。皆、お互いに話しかけるわけでもなく、用も無いのに携帯を取り出したりする微妙な雰囲気だつた。

集合時間3分前になつても迎えのバスが来ず、「変だなあ」という雰囲気が辺りに漂い始めたので、わたしも「この場所でありますよねえ?」とか話しかけようかと思つたが、何か負けた気がするので止めた。

第一、それで野木温泉行きの観光客に話しかよつものなら、立ち直れる気がしない。

集合時間1分前にバスが到着し、乗り込むが、思つたよりも連れ同志の入学者は少なかつた。

教習所への道中、皆押し黙つてこれまた妙な雰囲気だつたが、わたしは遠くの看板をしきりに見ていた。  
うわの空だつたのではなく、買つたばかりでメガネに慣れていなかつた為、視力が心配だつたからだ。

地獄行きのバスとはいえ、着いて早々  
「視力が足りません。本当にありがとうございました。」  
ではあまりにもお粗末だ。

そのうち、広い通りに出たが、事前に送られてきた資料にあつた近辺地図に載つていた店をいくつか見つけた。

マクドナルド、セブンイレブン、ゲームセンター、カワチ、そしてモスバーガー。その隣に細い道。ワインバーが点灯する。曲がる。進入する。あ、やばい。着いた。

もう、気分はもっぱら「強制収容」だった。絶望感の塊になりかけたわたしだったが、ふと目を向けると、なんと敷地内にゲームセンターがあつた。

しかも、「麻雀格闘倶楽部」「クイズマジックアカデミー」などと、妙に期待感を持たせるカラフルなポップが貼られている。僅かだが、後のお楽しみが出来た。

バスを降りた入学生達は、二階の第二教室に通された。

長机には名札と書類が置かれている。記入する箇所、ハンコを押す箇所等の説明を受け、記入中に少人数ずつ部屋の後ろで視力検査を受ける。

わたしは机の下で母にメールを打ち、書類を記入した。住民票等をカバンから取り出していると、すぐに母から返事が来た。

「入れてない！」

案の定、ハンコ忘れやがった。

エンコ（押印）で勘弁してもらえたが、どうでもよすぎて住民票その他をすべて母にまかせつくりで、確認もせずにここに来た自分を、

激しく悔いた。

資料の必要物欄の横にわざわざ

? 住民票

?

? 保険証

?

? 免許証

?

? ハンコ

?

と マークを書いた跡があつても、決して母を信用してはならないと、息子の自分が分かつていざに誰が分かり得るというのか。

書類を書いた後は、部屋の鍵を渡され荷物を置きに行つた。

昼を挟んで入学式になるのだが、同じ部屋の一人は簡単に挨拶を交わした後すぐに食堂に行つてしまつた。

毎食分の金額も合宿料金に含まれているので食べない理由は無いのだが、昼用のおにぎりが腐るので新しい自分の寝床でモソモソと食つた。

入学式は簡単な偉い人の講話と、施設や日程の説明で終わつた。

どうやら、説明を日本語に直すと、今日は午後からさつそく学科が2时限、技能が2时限あり、技能の最初1时限目は、模擬運転機械を使った模擬講習ということらしい。

ありがたい話だが、正直、模擬運転は3时限は欲しかった。  
どうやら技能2时限目の指導員は、念仏でも唱えておいたほうがよ  
さそうだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5836/>

---

ネギと手品と四暗刻

2010年10月12日02時21分発行